おとのないうた

上月ゆひろ

夜明けの月

午前４時
最終列車もとうに行き
回送列車も通り過ぎた
夜明け前
真夏と言えど
さすがにこの時間は涼しくて
誰もいない線路脇で
一人　佇む

白んできた空に浮かんだ白い月

サンダルの音さえ
アスファルトに響く
午前４時
少し湿った私の髪を揺らして
乾いた風が吹き抜ける

工事中の高架の上に浮かんだ白い月

あぁもうすぐ
始発電車がやってくる

雪の蝶

凍えるような夜の空から
舞い降りてきた白い粉雪
手袋の上に落ちてきた
一粒の小さな白い花を
可愛い
と彼女が笑った

そっと包み込む体温で
瞬く間に
花は色も形もなくしてしまう
寂しそうにそれを見送って

次の花を追って手を伸ばす彼女の
肩に髪に
次々と花は落ちてきては
すぅっとはかなく消えていく

追いかけて　捕まえて
儚く消えて　夢のように

降り続く雪に手をかざし
次の花を探すから
雪の花畑の彼女は赤い蝶
マフラーが風に揺れて
羽のように広がって

コートの襟を立てて
寒さから逃げるように
足早に去っていく人波の中で
ブーツのかかと鳴らしながら
雪を追って舞う彼女は赤い蝶
無彩色の街の景色に
浮ぶ極彩色の美しい人

逃がさないで　捕まえて
消えないように　夢のように

程なく雲が流れて

空は泣き止んでしまって
身体の芯まで凍らすような
風が彼女を吹き抜けていく
残念そうに空を見上げてから
綺麗だったね
と彼女は笑った

「愛」

今ここにはなくて
色や形があるわけではなくて
いい匂いがするわけでもなくて
美味しいわけでもなくて
触れるものでもなくて
音を奏でるものでもなくて
でもどこかに
確かに存在している　それは「なにか」

たとえば私と絵画の間に
たとえば犬と飼い主の間に
たとえば母と子の間に
たとえば男と女の間に
その空間に
たゆたっている　それは「なにか」

ときには優しい手触りを持って
ときには甘美な香りと共に
ときには激しい苦味をまとって
ここに舞い降りてくる　それは「なにか」

永遠に変わらない
常に一定でありえない
それは「なにか」

今　私からあなたへ伝えたい
ただ一つの想い
それが「なにか」

うそつき

今日が終われば　またしばらく会えなくなるね
いっぱい話したいはずなのに　何故か
沈黙が二人の間流れる
元気？
と心配そうに伺うあなたの横顔に
元気だよ
と嘘をついた

カンのいいあなたのことだから
へたくそな作り笑いとか
背中を向けて泣いてることとか
やっぱりばれてるのかな　だけど
悲しい真実であなたに嫌われるより
優しい嘘をつかせてよ

はじめに二人約束したね
あなたにだけは嘘をつかないって
だけど　実は初めからそれって嘘でしょ
何気ない顔してあなたが
嘘をついていたこと知ってるんだ

カンの悪いわたしだって
先週のデートで今月ピンチなんだとか
夜勤明けの電話が辛いこととか
ちゃんと知ってるんだから　だけど
厳しい真実知って冷めるより
優しい嘘で夢を見せてくれるのよね

判っているよ　だから何度でも
優しい嘘をついてよ
そしてわたしは必ずそれを見破って
その後ろに隠れたあなたを見つけてあげる

判っていてよ　だから何度でも
わたしはあなたに嘘をつくよ
そしてもしもできるならそこに隠れた
本当のわたしにあなただけは

気付いて

Neglect

「老人ホームで虐待死？」

画面に大きく映し出された三文字
ほんの一瞬
ＴＶの前でため息が満ちる
明日はわが身と知りつつも
素知らぬ顔で今日も素通り

　モウドウデモイインデス
　ドウセ誰モ助ケテハクレナイノダカラ

老眼鏡をかけないと
新聞さえ読めなくなりました
杖や手すりに捕まらないと
トイレすら行けなくなりました
足腰が弱っているのです
「ネタキリ」となるのも
最早時間の問題です
「ネタキリ」と蔑まれ死ぬにはまだ余りある時間を無駄に浪費しながら介護士とは名ばかりの若く粗野な連中にマニュアル通りの世話をしてもらい同じ所をぐるぐると廻り続けるベルトコンベアの上に寝かされてる気分を死ぬまで味わうようになるのも
最早時間の問題なのです

　ソレモマタ仕方ノナイコトト思イマス
　私ハモウ役ニ立タナイ人間ナノデスカラ

嫁が時折見舞いにきます
「義理」と「貧乏」をべったり貼った笑顔で
連れられて孫もやって来ます
小遣いもくれない婆さんに用はないと言いたげに
ごめんね
私はもうお前たちのお金を遣うことしかできなくて

夫が死んでもう５年
若さへの憧れもなくなりました
生きてても役に立てないこの身体
斯くなる上は残された日々を
緩慢に死んでいくのがお似合いというものでしょう

「おばあちゃん、元気そうだね」

そういって時折　できれば毎日
微笑みかけてくれる人がいれば
それだけで
それだけで

良かったのに

人が集まる談話室では
誰も見てないＴＶで黄門様が高笑い
私はゆっくり立ち上がり
ゆっくりゆっくり自室へ帰る

ゆっくり今日が過ぎていく
私たちは今日も緩慢に
死んで

いく

Everything -It's You-

食事に行った帰り道に
ふと曲がってみた　いつもと違う信号
きっかけは　そう　そんな些細なことだったけど

見慣れていた町並みが
こんなにも綺麗な夜景に変わる
その場所を教えてくれたのは
あなたでした

あるいは
時には日々の喧騒を忘れて
浜辺で２人ひねもす波を眺める休日
そんな過ごし方を教えてくれたのも
あなたでした

始まりはいつだって
そう
あなた　でした

初めてルージュを引いてみた
鏡の中のいつもと違うわたしを
あなたは可愛いと言ってくれたから

嫌いだった自分の顔
しゃんと上げて歩けるように
魔法をかけてくれたのは
あなたでした

あるいは
差し伸べられる手を偽善と嘲笑(わら)い
淋しいとさえ言えなかった私に
優しさを教えてくれたのは
あなたでした

ちょっとずつ
だけどきっとわたしのすべて

変えてくれたのは

あなた　でした

life line

水
日光
綺麗な空気
　　欠けると生きていけないもの

電気
ガス
白いご飯
　　欠けると生活に著しく支障をきたすもの

お金
プライド
コンタクトレンズ
　　無くすと生活できないもの

マンガ
ケータイ
インターネット
　　無くすとかなり不便なもの

アナタ、
　　欠けると生活に著しく支障をきたすもの

・・・ノ コトバ
　　欠けると私が生きていけないもの

世界図絵

一世一代の映画がポシャった
鼻で笑われそれでおしまい
全世界が敵に廻った
そんな錯覚起こした夜

台本全部破り捨てて
フィルムを引きちぎりかけたとき
「この映画撮ったのってあなた？」
それはさしずめ神の御声

真実ってやつはひとつなんかじゃないさ
価値観なんて千差万別十人十色
グルグル混ざってバターになって
美しかないがこれが社会さ

10円玉を募金箱に落とす行為を
偽善だと嘲笑うやつもいるだろう
素肌を重ねて愛し合うことを
汚いというやつもいるだろう

どこかの誰かは俺を否定したとしても
いつか誰かが俺を肯定してくれるはず
いつかの誰かを俺が否定していたとしても
どっかで誰かを俺が肯定するだろうから

真実ってやつはひとつなんかじゃないさ
価値観なんて千差万別十人十色
千色万色混ざった絵の具
美しかないがこれが社会さ

たっとひとつの真実なんて
ナルシストどもにくれてやる
唯一絶対の価値観が欲しけりゃ
教祖様にでも聞いてくれ

坩堝の中は美しかないが

逆さから見ればこれもまた「美」
グルグル混ざる美しきバターの中で
今日も俺はバターになってる

食卓

懐メロを口ずさみながら
君が夕ご飯の支度をしてる
肉が焼ける香ばしい匂いと
まな板を叩くリズミカルな音
やがて食卓に並ぶ幾つかは
毎日のように消されている
小さな命のひとつなんだろう

今ブラウン管に映る
サンシャイン通りで通りすがりに
刺されて消えた少年のそれと同じように？

僕は時に加害者になり　時に被害者にもなる
どちらかの時の僕のために　僕は何ができるの？

突き出したナイフの先に付いた血と
消えた生命の意味と重さを
僕らは思い知るべきだ
彼の命を奪うことは出来ても
彼の命を返すことは出来ないのだから

君は時に被害者になり　時に加害者にもなる
どちらかの時の君のために　僕に何ができるの？

祈ルコトシカ出来ナイナンテ自己陶酔ニ浸ル他ニ
惜シミナイ愛ヲ
　　限リナイ慈悲ヲ
　　最低限ノ理性ヲ

接続詞"if"でつながれてる世界は
もしもボックスが無くたって訪れるんだ
いつか僕が加害者に
あるいは君が被害者に
なってしまったそのときは　どうか

どうか愛して

Which is...？

『無意味』という意味
『無価値』という価値
『混沌』という秩序
『不一致』という一致

ありそうに見えて実はないの
なさそうに見えて実はあるの

『知らない』という知識
『空』という集合
『無い』という存在
『嘘』という真実

なさそうに見えて実はあるの
ありそうに見えて実はないの

Are you Lady?

だって女ですもの

20代のうちには結婚したいわね
売れ残るのは嫌だもの
30過ぎて子供産んだら
身体のラインも戻らないし

だけどおんぶに抱っこは嫌だから
少しは自分で稼いでもみたいわ
高校卒業してＯＬでいいわ
掃除にお茶汲みコピー取り
楽して給料もらえるのなら
ハゲ上司のセクハラとだって
戦ってやろうってなもんでしょう

だって　あたくし　女ですもの
さぁ行くわよ　見ててらっしゃい

付き合うだけなら顔が良い方がいいわ
３日見たって飽きはしないもの
結婚するのはじじぃだって良いわ
お金さえ持っててくれればね

法律だとかフェミニズムだとか
男女平等とか叫んだって
まだまだ女には生きづらい世の中なんです
だけど炊事洗濯掃除に子育て
なんてできなくたってあたしなりに
生き抜いてやろうってなもんでしょう

だって　あたくし　女ですもの
さぁ行くわよ　見ててらっしゃい

メイク道具一式あれば
千の仮面だって演じて見せるわ
はかなげに？　たおやかに？
あなたのお気に召すままに
巧くできたらご褒美にキスして

家の中でも職場でも
あたしの居場所はデフォルト値：None
だから お願いだからどうか
貴方のために 自分のために
がんばってる　あたしを見ていて

だって　あたし　女だもの
たった一人になんかなれない

使える特権はフルに使って
ちょっとでもした損は猛烈抗議
いつか世界をひれ伏させて見せるわ
この身１つを武器にして

だって　あたくし　女ですもの
だって　あたくし　女ですもの

Endress　Start

明日ニ　ナレバ　スベテガ　オワル

辛イコトハ　ナニモカモ　ナクナル

ソシテ　新シイ　何カガ　始マル

今日トハ　チガウ　ワタシニ　ナレル

夜毎鏡にそう祈り
何時しか今日が明日になる

夏の接吻

今日もやけに蒸し暑い夜
締め切った窓のない部屋で
立てこもった俺たちの間を
生暖かい風が流れていく
エアコンなんぞない部屋の隅に
お情けのように置かれた扇風機が
許しを請うかのように少し
俯きながら首を振っている
汚れた壁を背にして立つそれが
どこか遠く昔の景色を髣髴とさせて
俺はわずかに唇をゆがめた

あの日もやけに蒸し暑い午後
日に焼けた教室の隅に
お情けで置かれた扇風機が
きしみながら首を振っていた
外からは死角になる位置を探して
彼女と２人夢中になってキスをした
抱き寄せた彼女の肩と背の
感触が妙に生々しく手に残った

そんな光景が
扇風機の首振りと合わせるように
押し寄せて引いてった

いまやもはや帰りえないあの日々

だが

あの夏は確かにあったのだ

純粋で無垢で公明正大で精錬潔白であり人を信じ人を愛し罪を憎み諍いを悲しみ真面目に謙虚に
切実に生きていけば幸せになれると本気で信じていた
あの夏は
確かにあったのだ

何かを変えてやりたいといい
その実すべてから逃げ出したかった
その為の金　その為の力（ぶき）

そんなもの総て否定するように
悲しそうに扇風機は首を振る
あの夏のキスに値する人間ではないのだと
哀れむように扇風機は首を振る
ただ静かに少し軋みながら

あの夏は　おまえにはやらぬと　宣告するように　彼奴は首を振る

今日もやけに蒸し暑い夜
その闇を切り裂き響いた銃声
ただ壁に穿たれただけの弾丸を尻目に
ただただ扇風機は首を振る
俺の心を存分に掻き乱し
俺の体を幾ばくか冷して
彼奴はただ静かに首を振る

朝は　まだ　来ない

今年も桜は咲きました

裏路地の桜が咲きました
連日の敵の戦火を逃れ
今年も変わらず春の衣をまといました
されど煙るような雨の中で
昨日隣村で銃弾に倒れた彼を悼むように
桜は静かに泣いておりました

今年も桜が咲きました
遠い空の下の悲劇を知らずか
桜は変わらず春を謳いました
されど桜が咲いたら再びここでと
言い置き異国に飛んだ君は来ず
桜は散っていきました

今年も桜は咲くでしょう
都堕ち民死に王替われども
砂漠の桜は咲くでしょう
我が待つ君が永遠(とわ)に来ずとも
並木の桜は咲くでしょう

来年も
再来年も